

戦後75年

戦禍の記憶 孫ら継承

県遺族会青年部

追悼式参加や忠霊塔清掃

戦没者の妻や子の高齢化が進む中、県内でも40〜50歳代の孫らが、県遺族会青年部（次世代の会）を発足させ、活動を活性化させている。戦争を直接知らない世代で活動を始めるきっかけは様々だが、国内外の慰霊行事参加や、忠霊塔の清掃などを通じて理解を深める。メンバーらは「歴史を知り、語り継ぐことが、未来の平和への礎となる」と意気込んでいる。

（阿部俊介）



「伝えるためには、まず自分が知ることが必要」と話す青年部長の黒川さん（高知市で）

部長の黒川真介さん（48）は、約3年前に地区役員だった父のすずめで遭った。祖父は沖繩に向かう途中、輸送船を撃沈され、戦死した。

（高知市）は、約3年前に地区役員だった父のすずめで遭った。祖父は沖繩に向かう途中、輸送船を撃沈され、戦死した。

くことは少なかった。活動する中で知識不足を痛感し、徳島市の戦没者記念館に視察に出かけ、語り部の話を聞くなどするうち、少しずつ思いは強くなっている。「伝えるためには、まず自分が知ることが大切。貴重な体験を聞くことが出来るのは、今しかない」

中岡美佳さん（57）（香美市）は16年前、祖父が戦死したフイリピン・ルソン島の地を踏んだ。幼いときから読んでいた、戦地の祖父からの数十通の手紙は、家族を気遣う気持ちにあふれていた。「祖父はあの手紙を、この場所で書いていたのか」。そう思うと、涙を止められなかった。

中岡さんは遺族会によるルソン島訪問に、今年1月までに5回参加。昨年6月には沖繩県での平和行進にも加わり、遺族らと交流を深めてきた。中岡さんは「私たちの世代にも活動が定着してきているのは良かった。忙しい世代だから、負担がかからない方法を模索していきたい」と話している。

青年部は、2018年9月に発足し、現在約250人が登録。うち約30人が、全国戦没者追悼式に参加するなど積極的に活動している。今月上旬には、高知市で会館を開き、県内に約130基ある戦没者を慰霊する忠霊塔の清掃を進めたり、マップ作りを進めたりすることを決めた。

県発足。追悼行事開催や慰霊巡拝ほか、県出身者の遺品・戦時資料の収集や忠霊塔の実態調査などに取り組んでいる。今年3月末の会員数は4384人で、10年前の2010年に比べ3割以上減っている。

高知市一宮地区の遺族会長を務める松崎三保さん（50）は、遺族らが高齢化する中、忠霊塔の清掃などを担っている。夫の祖父が戦没者で、慰霊碑を大切にしていた義理の祖母を手伝っていた縁で、3年前に会長になった。年2回の清掃に参加する遺族らは10人前後、70歳以上が大半だ。「とつとつと語る遺族の話から、戦争の傷は一生消えないと知った。10年後、20年後は自分一人かもしれないが、出来ることを続けることが未来につながる」と活動に励んでいる。